

阮籍五言「詠懷詩」の表現について

道家 春代

(安藤)

我々が従来見ることのできた阮籍の「詠懷詩」は、五言八十二首、四言三首であったが、一九八四年に人民文学出版社から再版された黄節による『阮步兵詠懷詩註』には、これらに加えて、先の三首を含めた四言十三首が収録されている。又、時間が前後するが、一九八三年に刊行された『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）にも、この計十三首の四言「詠懷詩」が収録されているが、これは黄節の校訂する諸本に拠ったものである。

これらすべてが確かに阮籍の作品であるとして（それを否定する資料は今のところ提出されていない）、阮籍の「詠懷詩」は、五言・四言あわせて九十五首現存することになる。とすれば『晉書・阮籍傳』が、「詠懷詩八十餘首を作り、世の重んずる所と爲る」と伝える数を上まわることになり、或いは、『晉書』のいう「詠懷詩」は、五言のもののみを指しているのかもしれない。本稿は、五言詩史上における阮籍の「詠懷詩」の表現技巧の特徴及び位置を考察することを目的とす

るものであり、従って、五言の「詠懷詩」のみを考察の対象とする。八十二を数える阮籍の五言詩はすべて「詠懷詩」という同一の題によってくくられているが、その一首一首の内容は一貫したものでなく、また同時の作とも考えられない。むしろ、折りに触れての感慨・絶望・慨嘆・思想・志などをおのおのに詠じたもので、ときには相反する気持ちや思想をいうこともあり、全体としては雑多なものである。『文選』は卷二十三に謝惠連の「秋懷詩」、歐陽建の「臨終詩」と合わせて「詠懷」のジャンルを立てているが、折り折りの感慨という意味では、阮籍の「詠懷詩」は、卷二十九の「雜詩」と、詩の系列としてはそう離れたものでないと考えられる。「雜詩」のジャンルについて、李善は、王粲の詩注に「雜は流例に拘らず、物に遇いて即ち言ふ、故に雜なり」といっている。また哀憤をいうものを少なからず含むという点では、卷二十三に「詠懷」のあとに置かれる「哀傷」のジャンル、中でも阮籍に先行するものとして、曹植・王粲の「七哀詩」に、その系譜の一端を築くこともできる。換言すれば、阮籍の「詠懷詩」は、王粲・曹植を代表詩人とする建安詩と、建安詩がその泉とす

る「古詩十九首」をはじめとする古詩を、継承しているといえるだろう。

吉川幸次郎氏は、阮籍の詩が悲哀をその基本的感情としていることで、彼以前の五言詩と連続していることを認めつつ、しかし一方で、阮籍がそれを、人間全体の問題として広い視野でとらえ、それと表裏して、深い孤独感を内包している点で、五言詩の歴史上に画期をなし、また、彼がよりどころとした老荘哲学にもとづいて、人間の不幸のよってくる人為的な要因を追求し、それからの離脱の方法を説く点で、従前の五言詩から分離展開していると指摘している。吉川氏はこのような内容をもつ「詠懷詩」を、思索者の詩と呼んでいる。

以上の氏の説は充分に首肯できるが、また、阮籍の深い思索から発した、従前の五言詩からの「詠懷詩」の内容・心情・思想の変化が、彼の五言詩の詩形式——詩句の構成・表現技巧にも、何らかの影響を与えたのであることも推測できる。

本稿では、「詠懷詩」が、詩の形式・詩の構成・句の使い方において、漢の古詩・建安の詩とどう異っているかを分析し、もとに帰って、それが阮籍の思索者としての資質とどう関っているかを考えた

二

「詠懷詩」の特徴の一つに、聯と聯との間の連続性が乏しいこと、

或いは一句一句の意味の独立性が高いことをあげることができる。そのために、詩の中で、個々の聯や句の働きが読みとりにくく、詩全体の意味もわかりにくいことも往々にしてある。阮籍の詩が難解である理由の一つがここにあるだろう。比較的解釈しやすい詩においてもこれがいえる。

その例をあげてみよう。

其一 $\wedge 1 \vee 2$

夜中不能寐 夜中 寐ぬる能わず

起坐彈鳴琴 起坐して鳴琴を弾ず

薄帷鑒明月 薄帷は明日に鑒らざれ

清風吹我衿 清風は我が衿を吹く

孤鴻號外野 孤鴻は外野に号び

翔鳥鳴北林 翔鳥は北林に鳴く

徘徊將何見 徘徊して將た何をか見る

憂思獨傷心 憂い思いて独り心を傷ましむ

この八句の短い詩も、他の詩の場合と同様、一語一句が隠避する意味や、背後にある事件が、注家たちによって詮索されている。が、その主旨が孤独感の表出にあることは明らかである。

詩の内容や語・句は「古詩十九首・其十九」、及び古樂府の「傷歌行」、また王粲の「七哀詩・其二」に類似を認めることができる。

古詩十九首 其十九

明月何皎皎 照我羅床幃 憂愁不能寐 攬衣起徘徊

客行雖云樂 不如早旋歸 出戸獨彷徨 愁思當告誰
引領還入房 淚下沾裳衣 (『文選』卷二十九)

傷歌行

古辭

昭昭素月明 暉光燭我牀 愛人不能寐 耿耿夜何長
微風吹蘭閣 羅帷自飄颻 攬衣曳長帶 屢屢下高堂
東西何所之 徘徊以彷徨 春鳥嚶南飛 翩翾獨翱翔
悲聲命儻匹 哀鳴傷我腸 感物懷所思 泣涕忽沾裳
佇立吐高吟 舒憤訴穹蒼 (『文選』卷二十七)

七哀詩 其二

王粲

荆蠻非我鄉 何爲久滯淫 方舟溯大江 日暮愁我心
山岡有餘暎 巖阿增重陰 狐狸馳赴穴 飛鳥翔故林
流波激清響 猴猿臨岸吟 迅風拂裳袂 白露霑衣衿
獨夜不能寐 攝衣起徯琴 絲桐感人情 爲我發悲音
羈旅無終極 憂思壯難任 (『文選』卷二十三)

古詩は「傷歌行」に比べて、同趣の句の繰り返しをさせている、二句四句を費して表現されている内容を一句又二句に集約して表現している、感情語が減少している、物語的連続が切断されている、等の点で違っているが、阮籍のこの作品では、それらはさらに顯著である。たとえば、古詩が「明月何ぞ皎皎たる 我が羅の床障を照らす」というのを、「薄帷は明月に墜らさる」と一句に表しているし、「傷歌行」

阮籍五言「詠懷詩」の表現について(道家)

よりは少ないながらもまだ「憂愁」「愁思」「涙下」と感情語が散見する古詩に対して、終結の「憂い思いて独り心を傷ましむ」一句に限られていた。「孤鴻」二句は、古詩には相当するものがないが、「傷歌行」の「春鳥は翻えって南に飛び 翩翾と独り翱翔す 悲声は儻匹に命じ 哀鳴は我が腸を傷ましむ」と対照してみることができる。また「夜中」二句は、「七哀詩」の「独夜 寐ぬる能わず 衣を撰えて起きて 琴を撫でる」と酷似するが、王粲がこの後に「糸桐は人の情を感ぜしめ 我が爲に悲音を発す」と、琴の音と心情との関係を説明してしまっているのと対照的である。

夜中なにかしら不安でねむれない。なんともしようがなくついに起きただして琴をひく。弦歌鼓琴することは、阮籍が愛した『莊子』では心の平静さを表わすものであったが、ここでは平靜でない心を慰め紛らわそうとするものである。そしてその憂人を包み且つ際立たせる明月の光とひんやりとした清風。ここで初めて憂いの正体が他物によせて暗示される——群れをはぐれた孤鴻と、故林を思つて鳴く鳥。それを受けて心情が吐露される。

一句が一事を表わし、二句一組のおのおのの聯は、自分の姿・いる場の情景・遠くで鳴くはぐれ鳥・再び自身(今度は心情)、と独立した内容をもって、他の三詩が、四句乃至それ以上で一段落をつくることのあるのと違っている。聯と聯とを繋ぐような言葉はないが、各聯は単に並列されているだけではない。詩の全体からとらえてみると、四つの聯は効果的に排列されている。第一聯第二聯で自分自身か

らその周りへと移された視点は、第三聯で、室内から戸外へ、実景から想像力によって象徴性を与えられた情景へと大きく動く。この情景は、つづいて第四聯の慨歎をひきおこすという、いわば転の働きをしている。

全体に叙述は簡潔で、心情や心情の動きを説明することがなく、情景を客観化して描写するので、孤独感³は鮮明になり、また孤独の内容は個別性を超越する。一方情景は、視覚・触覚・聴覚の三感によってとらえられ表わされているので、作者が抱いている孤独感³は、読者にも具体的に喚起される。

「其十七」をみてみよう。

其十七 八46V

獨坐空堂上 獨り空堂の上に坐す

誰可與親者 誰か与に親しむべき者ぞ

出門臨水路 門を出でて永き路に臨めば

不見行車馬 行く車馬を見ず

登高望九州 高きに登りて九州を望めば

悠悠分曠野 悠悠と曠野の分かる

孤鳥西北飛 孤鳥は西北に飛び

離獸東南下 離獸は東南に下る

日暮思親友 日暮れて親友を思い

暗言用自寫 暗言して用いて自ら写す

この作も「其一」と同様孤独をいうものであるが、やはり「孤鳥西

北飛」は蜀へ、「離獸東南下」は呉へ逃げた者たちを指す、等々の政治的背景がさぐられている。しかし、先の場合と同じく、単に孤独を詠ずるものとして考えていく。

この詩では、句は「其一」ほどの独立性をもたず、「出門」二句、「登高」二句は、これで一事であるが、一聯一聯の繋がり、すなわち、一つの行動から次の行動へ移る理由、また外物がある感情をひきおこす過程などの説明は一切省かれている。加えて、感情語を抑えて、作者の孤独感を、「はるか遠くまでも見通せる永い路に臨んでながめていても、行きかう車馬を一つも見ない。高所に登って望見すれば、果てしなく曠野が広がっており、天には孤鳥が、地には群れをはぐれた獣が、おのおのの方向へむかっている」という写景によって、自ずと湧きいでるように伝えている。

語りありべき友が身近にいない孤独をいう内容の詩は、阮籍以前ではたとえ劉楨の「贈徐幹」がある。孤独にたえられず室を出て、遙望し外物に触れて感慨をもよおすという展開も似ている。二十二句という長さで、細かく事物を述べるのは、贈詩の性格に規定されてのことでもあるだろうが、この詩と比べてみると、阮籍の孤独のとらえ方の特徴がよく際立つ。劉楨は風景を描写するときも、自分の心情からそれをとらえてする。一つの光景をかくと必ずそのあとに心情をのべているのである。それはつまりは心の動きを説明することなのである。やや長い全文をひいてみよう。

贈徐幹

劉楨

誰謂相去遠 隔此西掖垣 拘限清切禁 中情無由宣
 思子沉心曲 長歎不能言 起坐失次第 一日三四遷
 步出北寺門 遙望西苑園 細柳夾道生 方塘含清源
 輕葉隨風轉 飛鳥何翩翩 乖人易感動 涕下與衿連
 仰視白日光 嗷嗷高且懸 衆燭八紘內 物類無頗偏
 我獨抱深感 不得與比焉

〔文選〕卷二十三

これに対して、阮籍の孤独感の表わし方は、吳淇の評のとおりである。「独り空堂の上に坐せば、人無し。門を出でて永路に臨めば、人無し。高きに登りて九州を望めば、人無し。見る所は惟だ鳥の飛び獸の下れるのみ。その人無き処を写す、情を尽すと謂う可し。」

阮籍が自分の孤独感をとらえるとき、彼は自分の情に埋没せず、自分の外にある広い世界を観照する。その世界はひっそりと静寂で生命をもたず、己れとの関わりを拒否し、動かし難く絶対的である、という意味で孤独な存在である。彼は、そのままその孤独な世界と調和して喪我することはせず、静の世界で、やはり息づく自身の情をみだし、さらに深い孤独を感じる。それをひきおこすのが、彼の望見する静の世界を唯一動く、群れを離れた鳥と獸である。

「其十七」は、阮籍の思索の構造を、詩の構成によく反映しているといえよう。なお、第四聯は「其一」の第三聯と同じく、転の働きを示しており、阮籍の詩の型の一つを示している。

阮籍五言「詠懷詩」の表現について（道家）

三

二で比較的易しく解釈に問題の少ない詩を二首えらんで、阮籍の詩が、簡潔な表現と緊張をはらんだ構成とによって、詩が表わすイメージを大きくしていることをみた。

阮籍の詩は難解と古来よくいわれている。その理由の最たるものは仮託が多く本意が測り難いことにあるが、裏に隠された真意は、まず、詩の解釈そのものまでが各家によって異なったり、一つの句が否定的にとられたり肯定的にとられたりすることまでが往々にしてある。それはその詩が、各聯の独立性が強く、それに加えて典故表現が使われた場合に多い。

典故表現は詩のみならず中国の文章全般において頻繁につかわれる普通の技巧であることはいうまでもないが、阮籍も例外ならずこれを「詠懷詩」に多用する。しかし、阮籍の典故表現は彼以前の詩人たちとは一線を画した特徴を備えている。そしてそれは二で述べた詩の構成法と相互に関連して詩を難解にしているのである。この章では、阮籍詩において、典故表現は詩構成と表裏する問題であることを意識しつつ、これを考察したい。

一口に典故表現といっても、それは大きく二種に分けられる。一つは語又は語句が出典を持つ場合、もう一つは故事が詩の題材や句に用いられる場合である。そこでまず、阮籍以前の詩人における、この二

種の典故表現法を、曹植の五言詩を例にとって考えてみよう。

曹植詩では後者が用いられるのは楽府詩に多い。そこで後者の場合を楽府詩で、前者の場合を徒詩でみていくことにする。

雑詩六首 其五

曹植

僕夫早嚴駕 僕夫 早に駕を嚴しむ

吾將遠行遊 吾 將に遠く行き遊ばんとす

遠遊欲何之 遠く遊びて何くに之かんと欲する

吳國爲我仇 吳國は我が仇爲り

將騎萬里塗 將に万里の塗を騎せんとす

東路安足由 東路は安んぞ由るに足らん

江介多悲風 江介 悲風多く

淮泗馳急流 淮泗 急流を馳す

願欲一輕濟 願わくは一たび軽く濟らんと欲すれど

惜哉無方舟 惜しい哉 舟を方ふる無し

閑居非吾志 閑居は吾が志に非ず

甘心赴國憂 心に甘んじて國憂に赴かん

(『文選』卷二十九)

李善は「僕夫」二句に「楚辭」「遠遊」の「僕夫懷兮心悲」「願輕輕兮遠遊」と王逸「九思」の「嚴車褭兮出戲遊」を引く。「遠遊」は濁濁した現世を離れて神仙世界に遊ぶことをいうものだが、曹植のこの詩にはその意はなく、ただ「楚辭」の言葉を用いて、南方の趣きをたそうとしているだけである。「江介」の句に、李善はやはり「楚辭」

「九章・哀郢」の「哀江介之悲風」を引く。これも「哀郢」の内容には関わりなく、吳楚地方の現在の戦況をいうのに「楚辭」の言葉を借りたのみである。李善注はまた「吳國」一句に「説苑」を引いている。「楚王謂淳于髡曰、吾有仇在吳國、子能爲吾報之乎」。曹植は確かにこれを意識しているだろうが、この句はもちろん曹植自身の吳への敵対心を述べるものであって、楚王の吳に対するものではない。

この詩における典故表現は、「楚辭」の語句を使って吳楚地方を彷彿させ、「説苑」の楚王の言葉を用いて吳への自分の敵愾心を強く印象づける効果をねらったものであって、この詩自体は、これらの出典を知らなくても充分理解できる。つまり、典故は、詩にとって技巧上のものではなく、詩の内容を背負うほどの大きな役割を与えられていないのである。そしてこのような詩語のイメージをふくらますものとしての典故表現が、阮籍以前の五言詩における一般であった。

一方楽府において、楽府が諷刺や仮託の意をもつとき、故事が題材として使われ、当然典故表現は詩に大きな意味と役割とを果たし、積極的に働く。

怨歌行

曹植

爲君既不易 君爲るは既に易からず

爲臣良獨難 臣爲るは良に独り難し

忠信事不顯 忠信 事 顕れずんば

乃有見疑患 乃ち 疑わるる患い有り

周公佐成王 周公 成王を佐け

金滕功不刊 金滕の功 刊はられず

推心輔王室 心を推して王室を輔たすくるに

二叔反流言 二叔 反かえって流言す

待罪居東園 罪を待ちて東園に居り

汝涕常流連 汝涕して常に流連たり

皇靈大動變 皇靈 大いに動変し

震雷風且寒 震雷 風ふきて且つ寒し

拔樹俛秋稼 樹を抜き 秋稼を偃よし

天威不可干 天威 干おす可からず

素服開金滕 素服にて金滕を開き

感悟求其端 感悟して其の端を求む

公且事既顯 公且 事 既に顯れて

成王乃哀歎 成王 乃ち哀歎す

以下四句省略 (『曹集鈔評』卷五)⁽¹⁾

この篇には古辞あるいは曹丕の作という異説もあるが、余冠英ら大方の意見は、曹植が、太和年間、兄曹丕の子明帝に遠ざけられたり疑われたりしたとき、同じく叔父・甥の關係にあった周公と成王とが諒言によってひき離された事件に託して、身の潔白を述べたものとする。今、それに従う。

篇首に『論語』「子路篇」の「爲君難、爲臣不易」を用いて一般的な問題を提示し、第四句以下は『尚書』「金滕」の故事に依拠する。

「金滕の功」とは、周武王が疾を得たとき、周公が自分の命を武王の

「阮籍五言「詠懷詩」の表現について」(道家)

代わりにすることを冊にして神に祀り、その冊を金でしばった匱の中

に入れ、その後武王の疾が癒えたことをいう。「推心」以下十二句は、

武王の死後の事件を述べる『尚書』の文を巧みに詩にしたている。

…… 武王既喪、管叔及其羣弟、乃流言於國、曰、公將不利於孺子、

周公乃告二公曰、我之弗辟我、無以告我先王。周公居東二年、則罪人

斯得、…… 秋大熟、天大雷、雩以風、禾盡偃、大木斯拔、邦人大恐。

王與大夫盡弁、以啓金滕之書、乃得周公所以爲功代武王之說。……

王執書以泣曰、其勿穆卜、昔公勤勞王家、惟予沖人弗及知、今天動威、

以彰周公之德、惟朕小子、其新逆、我國家禮亦宜之。王出郊天、乃雨

反風、禾則盡起、二公命邦人、凡大木所偃、盡起而築之、歲則大熟。

「怨歌行」では、故事は最初にたてられた「爲君既不易 爲臣良獨

難」という命題を例証するための題材である。「金滕」の故事を知ら

ないでは詩を理解することをできないし、また逆に、「金滕」の故事

さえ承知して読めば、全篇の意味と、その仮託された曹植の心情は容

易に読みとることができる。

別の例をみてみよう。

豫章行 曹植

窮達難豫圖 窮達は予め図り難く

禍福信亦然 禍福も信まことに亦然り

虞舜不逢堯 虞舜 堯に逢あわされば

耕耨處中田 耕耨して中田に処あらん

太公不遭文 太公 文に遭あわされば

漁釣終滑川 漁釣して滑川に終わらん

不見魯孔丘 見ずや 魯の孔丘の

窮困陳蔡間 陳蔡の間に窮困せるを

周公下白屋 周公 白屋に下れば

天下稱其賢 天下 其の賢を称たたう

(『曹集銓評』卷五)

篇頭で、窮達禍福は自分自身では企図しがたいと命題を述べ、歴山で農耕を営み、雷沢で漁業を営みながら堯に見いだされた舜と、清水のほとりて釣をしていて周の文王に挙用された太公望呂尚の幸違と、君子でありながら用いられず、陳蔡の間で兵に圍まれ、食料も尽きる禍にあった孔子の不運の、三つの故事を挙げて、それを例証する。最後の二句は、周公が人材を求めるのに、寸暇を惜しんで相手の貴賤を問わず人に会い、天下に称讃されたことをいって、人の窮通には運不運があるが、それは君側の人材登用への努力に左右されるのだ、という意を託している。おそらく曹植自身、魏朝の輔弼たることを望み、またその自信もあるのに、彼を遠ざけて奸臣を近づけている明帝を、諷諭しているのであろう。

この楽府では一つの命題を証明し、解決をつけるのに、複数の故事を用いているが、その証明のしかたは直線的であり屈折はなく、また結論も意外なものではない。それは、一つの故事を一篇の題材にして、いる先の楽府詩と同じである。

以上、三首を例にして曹植詩における典故表現をみてきたが、で

は、阮籍はいったい「詠懷詩」という徒詩で、典故をどのように用いているだろうか。次に、「阮籍における典故表現を考察してみたい。まず、第一の典故表現——語・語句が言葉として出典をもつ例をみてみる。

其十四八18V

開秋肇涼氣 開秋 涼氣を肇め

蟋蟀鳴床帷 蟋蟀 床帷に鳴く

感物懷殷憂 物に感じて殷憂を懷いだき

悄悄令心悲 悄悄と心を悲しましむ

多言焉所告 言多くして焉いやくにか告ぐる所あらん

繁辭將訴誰 辭繁くして將に誰にか訴えん

微風吹羅袂 微風 羅ろの袂たもとを吹き

明月輝清暉 明月 清き暉ひかりを輝かす

晨鷄鳴高樹 晨鷄 高樹に鳴けば

命駕起旋歸 駕くまを命じて起きて旋帰せん

李善の引く典故は次のようである。「蟋蟀鳴床帷」は『毛詩』「幽風・七月」の「十月蟋蟀入我牀下」、「感物懷殷憂」は古詩「感物懷所思」と『韓詩』の「耿耿不寐 如有殷憂」、「悄悄」は『毛詩』「邶風・柏舟」の「憂心悄悄 愠于羣小」、「晨鷄鳴高樹」は古樂府「鷄鳴」の「鷄鳴高樹頭」。

これらの典故は、さきの曹植の「雜詩」と同様、とくにそれを意識

しなくとも読むことができる。「秋の始まりは涼氣が先触れる、する
と蟋蟀が床の帷のもとにきて鳴く。「蟋蟀」きりぎりすが秋の虫であ
ることは何も『詩經』によるまでもない。「物にふれてあふれる憂を
懐く、これらは私の心を惜々と悲しませるのだ。言葉を多く費して我
が心の憂いを述べるにしても、いったい誰に訴えようというのか。微
風がうすぎぬの袂を吹き、明月はきらきらと清らかな光をまいてい
る。そうこうしているうちに一番鶏が鳴きだした、鴛鴦を命じて起きて
帰ろう。」「古楽府の場合「鶏鳴高樹頭」は「狗吠深宮中」と対偶をな
し、平和な世の象徴であるが、ここでは単に朝がくるのを示すのみで
ある。

しかし、この詩の場合、典故を踏まえると、詩意は深まり複雑にな
る。「窗風・七月」のこの前の句は「七月在野 八月在宇 九月在
戸」そして十月云々であり、蟋蟀の位置の移りかわりは秋の深まりの
程度を示し、「牀下」にくるのは晩秋または初冬である。そこで「開
秋」二句はただ秋という季節をいうだけでなく、兩句が呼応して経過
していく時間をも表現することになる。また「柏舟」の前後の句をと
りだすと、「耿耿不寐 如有隱憂 微我無酒 以敖以遊」で、この中
の語を使うことによって、寝つかれぬ人を連想させ、しかもその憂が
快樂によって解消されるものではないことも暗示する。

この詩は「其一」と同じく、夜中に憂愁のため眠れない人を詠じ、
「古詩十九首・其十九」・「傷歌行」に似ているが、簡潔な表現や聯
の独立性など、やはり阮籍らしさが見える。人物の動きの直接的描写

阮籍五言「詠懷詩」の表現について（道家）

は一切なく、「蟋蟀鳴床帷」、「柏舟」を典故とする「殷憂」「悄悄」、
「晨鷄鳴高樹」等の語句によって、この人が憂のためとうとう夜明し
しそうであることを間接的に示す。憂の原因も「命駕起旋歸」から客
遊かとも思われるが、冒頭二句や「柏舟」が連想させるのはそれでは
ない。出典をもつ詩語はその典故によって単に興趣を加味するだけで
はなく、もともと独立性の強い阮籍詩の句や聯を構成しているので、
詩の叙述上の一部分としてそれに解消されてしまうのではなく、言葉
自体の背後にあるもの、またその言葉を含む出典全体の表現するもの
を失わずに、詩を読む者の連想の幅を広げる。これが、阮籍の「詠懷
詩」における典故表現の特徴の一つである。

さて、先に故事が詩の題材として大きな役割を果たす典故表現の例
を、曹植の樂府詩においてみたが、次には阮籍詩のそのような典故表
現の特徴を考察することにする。

其六十八(45)▽

儒者通六藝 儒者は六芸に通じ
立志不可干 志を立てて干す可からず
違禮不爲動 礼に違えば動きを為さず
非法不肯言 法に非ざれば肯て言わず
渴飲清泉流 渴いては清泉の流れに飲み
饑食甘一簞 饑えては食するに一簞に甘んず
歲時無以祀 歳時にも以って祀る無く

衣服常苦寒 衣服は常に寒さに苦しむ

屣履詠南風 履を履きて南風を詠じ

緇袍不華軒 緇袍にて華軒せず

信道守詩書 道を信じて詩書を守り

義不受一餐 義として一餐を受けず

烈烈褒貶辭 烈烈たる褒貶の辭

老子用長歎 老子は用つて長歎す

陽がねじくれるほど彼がきらっていた其六十七（55）「洪生資制度」篇に書かれているような偽善的な洪儒とは違つて、学問を修め志を貫き、清貧に処り、節義をくずさない誠実な儒者の姿を、『論語』『尸子』『莊子』『孟子』等に拠つて並列する。これらの典拠は、もちろんこういふ儒者の態度をすぐれて尊敬すべきものとしているのだが、阮籍は、あらかじめ価値の判断を示すことはせずに列挙する。当然読み手は正の価値を念頭におきつつ読みすすみ、最後の聯にきてとまどふ。このような誠実な儒者をも阮籍は否定するのである。その否定も阮籍自身の判断のことばをもつてしてではない。「烈烈褒貶辭」は蔣師焯のいうように『老子』の「天下、皆、美の美為ることを知る、斯、惡なる已。皆、善の善為ることを知る、斯、不善なる已」を意識しつつ、儒者の善惡をはっきりつけたがる激しい態度をいい、老子の長歎は、黄節や古直の指摘する如く、『莊子』にたびたびあらわれる老子による孔子批判の全体に拠るのである。最後の聯による否定で、読み手は、また初めにもどつて詩句の意味を確認しなければならなく

なる。阮籍はこのように意外で屈折した典故表現を、効果的な句構成によつて行つてゐる。

其二（4）

二妃遊江濱 二妃 江の浜に遊び

逍遙順風翔 逍遙して風に順いて翔る

交甫懷環珮 交甫 環珮を懷けば

婉孌有芬芳 婉孌として芬芳有り

猗靡情歡愛 猗靡として情は歡愛し

千載不相忘 千載 相忘れざらんとす

傾城迷下蔡 傾城は下蔡を迷わせ

容好結中腸 容好は中腸に結ほす

感激生愛思 感激して愛思を生じ

萱草樹蘭房 萱草 蘭房に樹り

膏沐爲誰施 膏沐は誰が為に施さん

其雨怨朝陽 其れ雨ふれよといいに朝陽を怨らむ

如何金石交 如何ぞ金石の交わりの

一旦更離傷 一旦にして更に離傷するを

最初の四句は『列仙伝』にみえる説話による。「江妃の二女、何許の人か知らず。出でて江の涓に遊び、鄭交甫に逢り。其の神人なるを知らざるなり。女遂に珮を解きて之に与り。交甫悦び珮を愛す。去ること数十歩にして、空しき懷に珮無し。女も亦見えず」。「傾城」の句は李延年が妹を漢の武帝に推薦した歌の「一顧傾人城」と宋玉「登徒

子好色賦」の「臣が東家の子、嫣然と一笑すれば、陽城を惑わし、下蔡を迷わす」に基づく。「萱草」以下三句は、出征した夫を待ちわびる妻の気持ちをうたり「衛風・伯兮」による。「……自伯之東 首如飛蓬 豈無膏沐 誰適爲容 其雨其雨 杲杲出日 願言思伯 甘心首疾 焉得諼草 言樹之背 願言思伯 使我心痠。」おのおのの出典についての諸注家の説は一致するが、この詩の解釈については意見がわかれる。多くの釈家は、阮籍が江妃二女と鄭交甫の故事を、交甫が環珮を受けとったところまでしかいわないので、彼らのことを仮りて男女の出会いを述べるのみと考えている。鈴木虎雄氏の訳解もそうである。鈴木氏は、「猗靡」二句は交甫と二妃の睡みあい、「傾城」二句は二妃の美貌とそれに魅せられた交甫のこと、「感激」四句は二妃の交甫への恋ゆえの憂と彼を待つ姿、最後の二句はやってこない交甫への二妃の怨みと嘆きと解釈する。全篇を二妃と交甫との物語ととることでは鈴木幸男氏も同じである。しかし鈴木氏は、「傾城」二句を下蔡の美女に交甫が浮気したと解釈し、「感激」以下は交甫の心変りに泣く二妃の哀嘆と訳解する。鈴木氏は、「種種附會の説があるが予は取らぬ。予は文字通りにみる、本書編者の意もさうであるう」というものの、文字通りにみても、「此詩の結構、語の用法はごちゃ／＼して主客混雑のきらひがある。作者の他作と似ない」ところがあり、鈴木氏の訳解にしても鈴木本氏にしても、今一つ釈然としないものが残るのではないだろうか。

沈約は「婉嬾なれば則ち千載忘れざるに、金石の交は、一旦にして

軽く絶ゆ。未だ徳を好むこと色を好むが如くするものを見ず」という。つまり、最後の二句は君臣間の交誼の壊れやすさを慨嘆するものであり、それ以前の句は、男女間の情の強さをいうものと考えている。とすれば最後の二句を除く部分の解釈は鈴木氏に近いと推測できる。また、この詩に王朝篡奪を図る司馬氏への批判を読みとろうとする五臣の張統は、前半八句は初めは魏朝の輔弼として主を佐ける司馬昭をいい、「感激」以下は後に専横をふるい篡位しようとするようになった司馬昭の行動を憂う阮籍の慨嘆をいう、と考える。

このように多様な詩解釈が行われる所以は、この詩の典故が出典ははっきりしていながら、その典故がさし示すもの、他の句や典故との関係、詩全体の中の働きが、はっきりしていないからである。それは先の鈴木氏の指摘に関わる問題である。そこで、一つ一つの典故の原典の意味をまずおさえてみる必要があるとしよう。

最初の四句は江妃二女と鄭交甫の故事を述べたものだが、交甫は珮を受けとってからわずか數十歩行くうちにそれを失い、二妃もいずともなく消え去ってしまった。そのことを阮籍はいわないが、この故事を知るものは当然その結果をも知っているはずである。次の四句は、男女が変りない愛情を約束すると、女性の容貌こそが男性をひきつけることをいうが、李夫人が薄命で病の床にいたとき「我容貌の好を以って、微賤より上に愛幸せらるを得たり。夫れ色を以って人に事うる者は、色衰えて愛弛み、愛弛めば則ち恩絶えん」といって病床で武帝に顔を見せることを願として承知しなかったのは余りに有名であ

る。黄節と古直がこの『漢書・外戚傳』の「李夫人曰、我以容貌之好、得從微賤愛幸於上」と、宋子侯「董嬌儔詩」の「何如盛年去、歡愛永相忘」を注に引くのは、妥当である。男女の結びつきを弛めるのは女性の容貌の衰えばかりではない。お互いに愛し合いながらも、何か外的な要因によっても男女はひき離されることもあるのである。

『詩經』の「伯兮」の女性もそうして夫からひき離れた一人である。このように四句づつ三つの段落をそれぞれの原典に反って考えてみれば、三章には定めなき男女の愛という共通項が浮んでくる。そしてそれは最後の二句「如何金石交、一旦更離傷」に共鳴している。三章をそれぞれ独立した章の並列と見るのは、詩を一篇の愛憎物語とするのに比べて、不自然な感じがよくしたものを感じるかもしれない。しかし、我々は阮籍の詩を読むとき、唐突な、又は飛躍している、屈折している、という感覚をしばしば覚えないだろうか。

阮籍の詩が難解になるのは、このように詩構成が叙述的でなく、しかもおのおのの典故が暗示的で、他との関係、全体での位置を確認しなければならぬときである。

其十一 八 13 V

湛湛長江水 湛湛たる長江の水

上有楓樹林 上には楓樹の林有り

阜隴被徑路 阜隴は徑路を被い

青驪逝屢屐 青驪 逝くこと屢屐たり

遠望令人悲 遠望すれば人をして悲しませしめ

春氣感我心 春氣は我が心を感じしむ

三楚多秀士 三楚には秀士多きも

朝雲進荒淫 朝雲は荒淫を進む

朱華振芬芳 朱華 芬芳を振り

高蔡相追尋 高蔡 相追尋す

一爲黃雀哀 一に黃雀の為に哀しめば

涕下誰能禁 涕下りて誰か能く禁めん

かつて戦国時代の七雄の一であった楚の衰退をうたりこの詩は、そのこと自体をいうのが目的ではなく、何かしらを仮託したものである。諸家は、ここにあらわれる人物や事柄に、阮籍と同時代の人びとをあてはめることを試みている。具体的にどの人物がどれにあたるかはここでは問題にしない。むしろ、阮籍がいわんとすることは、個別の事件や人物関係への慨嘆ではなく、もっと普遍的な何かへの詠嘆であろう。

初六句はすべて『楚辭』「招魂」に拠って、美しい色彩豊かな風景がうつし出される。「朝雲」の句は「三楚の秀士」の一人宋玉が、先王の懷王が高唐に遊んで、夢に現われた巫山の神女と突ったことを賦す「高唐賦」に拠る。「妾在巫山之陽、高丘之阻、旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽春之本……」。「高蔡」と「黃雀」は『戰國策』「楚策」に拠る。賢臣莊辛が、寵臣と遊びふけり国政を顧まない襄王を諫めるが聴き納れられず楚を去って趙へ行く。果たして楚は秦に敗れ、襄王は城陽に流亡して逼塞した。襄王に召しかえされた莊辛は、楚國が敗れ

た理由を王に語る。その意見の中に、「高蔡」の故事と「黄雀」の故事とがある。「黄雀是に因りて以って俯して白粒を嘔み、仰いで茂樹に棲み、翅を鼓き翼を奮い、自ら以って患い無しと為し、人と争う無きなり。夫の公子王孫の左に弾を挟み、右に丸を握り將に己れに十仞の上に加え、其の類を以って招くを為さんとするを知らざれば、屋には茂樹に遊ぶも、夕には駭賊を調えられ、倏忽の間に、公子の手に墜つ。

……蔡聖侯の事、是に因りて以って南のかた高陵に遊び、北のかた巫山に陵り、茹谿の流れに飲い、湘波の魚を食い、左に幼妾を抱き、右に嬖女を擁え、之と高蔡の中に馳騁し、而して国家を以って事と為さず、夫の子発の方に命を靈王より受け、己を繋ぐに朱糸を以ってし、之に見えしめんとするを知らざるなり。」自分は得意に太平楽をきめこんで、その背後に大きな危険が迫っているの知らない者たち、襄王よ、あなたもまたその一人でした、と莊辛はいう。

詩の全体をみてみよう。あふれるほどの水をたたえる長江、岸辺の根の林は緑を映し、沢の藪は小径をおおい、その中を黒毛の馬が駈々と速やかに駆けてゆく、悲しい程に美しい春の江南の風景である。その美しい楚にはまた秀いでた才士がそろっていたが、あまりに美しい楚の神女は、朝驚となって楚王に荒淫をすすめた。朱い華のまき散らす朱い華に誘われて高蔡に遊んだ蔡侯がしのばれる。彼は楚の靈王に捕われてしまった。あの幸福に生きて危険を悟らなかつた黄雀のため、私は涕を流そう。表面上の意はこうである。がこれだけでは阮籍の意を汲みとったとはいえない。初六句は「招魂」の言葉を単に借り

ただけではない。王逸によれば「招魂」は宋玉の作で、罪無くして放逐された屈原の魂が散佚して還らぬことを哀れみ、その魂を呼びもどすために、外界が悪に満ちていることを陳べたて、楚の美しさを称えて、ここへもどってこいと招くものである。とすれば、讒言によって懷王に疎まれ、襄王に放逐された屈原を傷む意と、またそのような国であった楚の運命を暗示する意もここには含まれているだろう。屈原を哀れんで「招魂」を作った宋玉は「秀士」ではあったが、また「高唐賦」等を作って王に「荒淫」を勧めたものでもあった。これも楚国の将来の混乱を用意した。最後の四句——阮籍は、楚の敗北のこと、莊辛、襄王のことは一言もいわない。阮籍の「懷」がまず「高蔡」「黄雀」の故事に発していることは誤りではないが、それだけにとるのは阮籍の本意ではない。この二つの故事が「楚策」の莊辛と襄王の故事全体の意をになって読まれてはじめて、この典故表現は完成する。

千里の果てを見はるかすことのできる広大な江南の、心を傷める程に色彩やかに美しい原野の風景の中を、黒毛の四頭立て馬車を千台したてて盛大に狩りをする楚王の列はまた楚の滅亡を呼ぶ「荒淫」でもある。その滅亡はまた本来王を諫め輔佐たるすぐれた臣たちによって更にすすめられる。そして君臣ともに我が盛りを謳歌するその背後には、滅亡の危機が迫っている。以って傷み嘆すべし。

阮籍は詩語として典故表現を使用するときも、故事を詩の中に題材

としてとりこむときも、単なる語の借用としてや、興趣をふくらます技巧としてや、詩の訴えんとする主張・感慨・命題の単純な例証としては、あまり行なわれない。その語・句は、原典の中でその語のになう意味やイメージを含みこんだ言葉として、或いは原典や故事全体を凝縮した言葉として用いられ、また、例証の材料として用いられるときも、意表をついた、又、屈折した用い方がなされる。であるから、阮籍の典故表現は非常に複雑でわかりにくいものとなる。阮籍詩における複数の典故は、一見相互に関りないかのように、その間を繋ぐ言葉なしに孤立的に使われ、それぞれを繋ぐには、各故事間に共通する要素や観念、また故事が暗示するものをさがさなければならぬ。そうすることによって詩は全体としての意味を深め、個別的な諷諭や仮託から、もっと大きな問題への詠歎へと詩の世界は広がる。従来、仮託・諷諭の役割を果たした樂府詩の一部は、阮籍において、仮託の意をもちつつ、詩人個人の内面性をも反映した「詩」として変容し、五言詩の表現の対象の範囲を、また広げたのではないだろうか。

四

本稿でとりあげたほんのわずかな詩によって、阮籍詩の典故表現と詩構成のすべてをおおうことができたわけではなく、むしろ、その一端を示したにすぎない。とくに詩構成については、単に句、聯の独立性をいいたのみで、各聯相互の繋がり方、全体の形について考察で

きなかったのは残念である。しかし、今回のこの乏しい資料と考察から次のことがいえる。

「詠懷詩」において、詩に響かれる一つ一つの事柄は、典拠があるときもないときも、独立して並べられ、作中の人物や語り手―阮籍の動作の連続は断たれ、心情の説明は省かれる。読み手は、個々の句、あるいは聯に書かれた個々の事象を貫いている法測や、それらに暗示された観念を読みとらなければならぬ。そうしてとりだされた法測や観念は、個別性を超えた普遍性を帯びることになる。阮籍の心情や思想は、このような詩構造によって表現される。

この詩のしくみは、阮籍の思索者としての態度、世界をとらえるそのとらえ方と、大きな関係があると思われる。阮籍が、自己の思考の原理としていたのは、老荘の思想であった。老荘主義は、天地万物の盛衰存亡、善不善、長短夭寿などは、表面上の相対的な差違にすぎず、万物は斉しく、あらゆるものは「道」という根源的なものに支配されていると考える。それに則った、個々の事象を見て、その中に貫く法則や原理をみいだそうとする思索的・観象的な阮籍の態度・思想構造こそが、「詠懷詩」のこのような表現のしくみを決定しているのである。また、こういう詩構造によってのみ、吉川氏のいう、阮籍が人間全体の問題として広い視野でとらえる悲哀と、かれの絶対的な孤独への詠嘆を表現することができたのである。

また、視点を変えてみれば、五言詩は、阮籍の「詠懷詩」において、詩のうたう内容が彼以前の五言詩のもっていた民歌的な感傷を脱

したと同時に、表現技巧においても、従来の素朴さを脱したといえよう。「詠懷詩」は多様な典故表現を駆使して、五言詩における典故使用による表現の可能性をひろげ、又、短詩型による印象的な表現の方向を指し示しているからである。

注

- (1) 「阮籍の『詠懷詩』について」吉川幸次郎全集第七巻。
- (2) 「詠懷詩」の編次は、黄節『阮步兵詠懷詩註』及び古直『阮嗣宗詩箋』すなわち『古詩紀』に拠り、△内には、嘉靖間陳德文、范欽刻二巻本『阮嗣宗集』を底本とする上海古籍出版社刊『阮籍集』（一九七八年）のものを記した。原文は、この『阮籍集』に拠り、校勘もこれにまかせる。
- (3) 呂延濟の「夜中險昏亂……」、呂向の「孤鴻險巖臣孤獨在外。翔鳥、鷲鳥、以比權臣在近、謂晉文王」など。
- (4) 道家秦代「古樂府と古詩十九首——抒情詩の成育について」『名古屋大學中國語學文學論集』第四輯（一九八四年）参照。
- (5) 何焯『義門讀書記』に「孤鳥離歌險死吳蜀者」、古直の引く會星笠は「孤鳥西北飛、指夏侯霸奔蜀」、また古直自身は「會氏之說、是也。陸歇東南下、蓋指文欽奔吳」といふ。
- (6) 黄節の引く全文は「吾非斯人之徒與而誰與。乃獨坐空堂上、無人焉。出門臨永路、無人焉。登高望九州、無人焉。所見惟鳥飛獸下耳。其爲無人處、可謂盡情。」
- (7) 阮籍の典故表現を論じたものには、次の論文がある。由元由美子「阮籍詠懷詩における典故表現の特異性について」九州大学中国文学学会『中国文学論集』第五号、一九七六年。この論文からは、多くの示唆を受けた。
- (8) 今本は「車駕」を「轎駕」に作る。

阮籍五言「詠懷詩」の表現について（道家）

- (9) 今本は「悲江介之遺風」に作る。
- (10) 佚文。
- (11) 丁晏集、葉菊生校訂。省略部分は「言欲竟此曲 此曲悲且長 今日樂相樂 別後莫相忘」
- (12) 『樂府詩集』卷四十二、『藝文類聚』卷四十一は植の作とするが、『北堂書鈔』卷二十九は魏文帝の作とし、『太平御覽』卷六百二十三は古詩とする。
- (13) 先の三故事について、黄節・古直らはそれぞれ『史記』の「五帝本紀」「齊太公世家」「孔子世家」を、周公については黄節が『孔子家語』をひく。
- (14) この句は古直のいうように、おそらく古樂府「傷歌行」のものであるう。
- (15) 『毛詩』「邶風・柏舟」は「嚴。嚴」を「隱。隱」に作り、毛伝に「隱、痛也」といふ。
- (16) 『老子』第二章。「天下皆知美之爲美、斯惡已。皆知善之爲善、斯不善已、故有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音聲相和、前後相隨。是以聖人處無爲之事、行不言之教、萬物作焉而不辭、生而不有、爲而不恃、功成而弗居、夫唯弗居、是以不去。」
- (17) 『藝文類聚』卷七十八。
- (18) 鈴木虎雄訳解『玉台新詠集』上。岩波文庫。一九五三年。
- (19) 松本幸男『阮籍の生涯と詠懷詩』木耳社。一九七七年。
- (20) (21) 鈴木、前掲書。
- (22) 『楚辭』「招魂」

亂曰

獻歲發春兮泊吾南征 某須齊樂兮白芷生
路貫虛江兮左長薄 倚沼畦漣兮遙望博
青巖結咽兮齊千乘 懸火延起兮玄顏蒸

名古屋大学文学部研究論集(文学)

步及驟處兮誘勝先 抑惹若通兮引車右還
 與王超夢兮課後先 君王親發兮憚膏兒
 朱明承夜兮時不可淹 阜函被徑兮斯路漸
 漣漣江水兮上有楫 目極千里兮傷春心
 魂兮歸來哀江南

(23) 吉川、前掲論文参照。